



地域で取り組む認知症高齢者支援

1 地域ケア会議から見えてきた課題

- ・ 制度に繋がらないひとり暮らし高齢者の支援。
- ・ 在宅医療・介護連携相談支援室における早期介入・早期対応。
- ・ 認知症介護者家族の負担が大きい状況がある。

2 対 象

啓発地域住民(南西部圏域)

3 具体的な取組み内容

【次世代育成】むくのき学園 8 年生「認知症サポーター養成講座」主催

他共催での圏域内小中学校での福祉教育講座の開催。

5 時限目と 6 時限目を活用。

前半：パワーポイントを使用して認知症の種類や病状、中核症状、周辺症状などの説明を行う。その後には包括、ブランチ職員の方で寸劇(コンビニで支払いに戸惑う認知症高齢者、公園で道に迷う認知症高齢者)

後半：個人ワークとグループワークを行い、グループごとに発表を行う。当日の意見の抜粋(公園で薄着で迷う認知症疑いの高齢者への対応をどの様に行っていくか、について)「グループで役割分担して対応する」「すぐに声かけをするのではなく見守る」「大人を呼びに行く」「交番へ連れていく、又は警官を呼ぶ」「自身が着ている上着を貸してあげる」「温かい飲み物を提供する」「暖かい場所へ移動する」等が出されている。



地域特性

啓発地域は高齢化率18.2%であり他地域の平均に対して高齢化率が低い。昨年より世帯数、地区人口ともに微増であるが、高齢化率については微減傾向にある。理由として、新築戸建が増えたことや新大阪駅近辺のワンルームマンションに単身者が多い事が予測される。啓発地域の高齢化率は低いが認知症に伴う困難事例が多い。新大阪駅周辺にはひとり暮らし高齢者が多く住まれているが、幹線道路を隔てて社会資源の少ない地域があり、自治会への参加率、地域との繋がりに乏しい等の課題がある。

4

取り組んだ成果と今後の課題

むくのき学園での福祉教育は平成25年から通年で行っており、子ども達や家庭での認知症高齢者への理解を深める事に繋がった。障がい者週間の取り組みとして、啓発地域において定着する事が出来ている。

毎年寸劇をプログラムの中に入れる事によって、認知症高齢者の置かれている状況を分かりやすく伝える事が出来、認知症を身近に考えてもらえる機会となっている。

今後の課題としては、コロナ禍においては感染予防対策に取り組みながら、今後も通年での実施を継続していく事。また、子ども達だけではなく、親世代にも波及できる様に、福祉教育でのグループワークの内容を家庭に持ち帰り、親子の対話の中で認知症に関して考えて頂く事が出来る様に、学校と連携を取っていく事が挙げられる。

開催地域や場所に関しても、今後包括として、連携機関と協働しながら拡充していく事が出来る様にしたい。

包括からのひとこと

通年で行っている取り組みにおいても、コロナ禍にあっては継続する事にも様々なりスクがあり、止む無く縮小しているものもあります。地域作りにあって、人と人が集まる事に対して大きな制約が課されている現状ではありますが、安全性を確保しながら、継続する事、一つひとつの取り組みの意義を確認しながら、現状に合わせたやり方を再考していく事が必要ではないかと考えています。今年を地固めの時期として、地域作り、認知症高齢者支援の取り組みを継続していきたいです。

区役所からのひとこと

認知症高齢者支援について、次世代育成として学校と連携し認知症サポーター養成講座を継続して実施し、親世代への理解にもつなげるよう取り組みを継続されています。また、介護予防教室において理学療養士と協働しコグニサイズなどの認知症予防を取り入れるなど他機関とも積極的な連携を図り幅広い活動を展開されており、今後、地域で認知症の方の支援体制が充実することを期待しています。



生野区地域包括支援センター
(社会福祉法人大阪市生野区社会福祉協議会)

認知症予防への気づきを促し、ボランティアなど社会参加への意欲と共に高齢者自身の意識力向上に努める

1

地域ケア会議から見えてきた課題

地域ケア会議から見えてきた課題の8割が認知症に起因するものであったことから、住民の認知症理解と認知症対応力向上を目指す必要があった。住民に認知症理解を求めるときに、これまでは高齢者とその家族に支援が向いていたが、認知症高齢者を支える若い世代の力が必要であることが分かり若い世代への認知症理解普及に取り組む必要があることが分かった。

2

対 象

- ・ 認知症予防については高齢者を対象とし、認知症の気づきについてはあらゆる世代を対象とする。

3

具体的な取組み内容

- ・ 認知症予防について高齢者を対象とし脳トレ教室。
毎月1回 歌かるた・相撲甚句・紙芝居・スクエアステップ・体力測定・エンディングノート・調理実習等を開催。男性参加者が多いという特徴がある。
- ・ 認知症への気づき。
認知症理解と気づき講座13回・徘徊模擬訓練1回
キャラバンメイト連絡会やおかちやまオレンジチームと連携し、小学生から高齢者までの幅広い年代に対象に開催。
- ・ 認知症マフ講座
開催2回。ボランティア等の社会参加への意欲の取り組みも見据えて実施。定員を上回る問い合わせがあり関心の高さがうかがえた。

地域特性

大阪市内で2番目に高齢化率の高い生野区の中でも高齢化が進んでいる圏域である。ひとり暮らし、高齢者世帯が多い。少子高齢化が顕著であり、小学校・中学校の統廃合が進んでいる。

4

取り組んだ成果と今後の課題

特に認知症マフ講座については、これまでと違う方向からの取り組みで主催者の期待以上の反響があった。

毛糸という高齢者に馴染みのあるツールを使うことで抵抗なく参加し、社会の役立っている実感や感想を持つ参加者が多かった。

研修や講演会という類のことがほとんどの中、高齢者自身が楽しく懐かしがりながら参加し、作品が認知症の人に喜んでもらえているといった達成感・充実感を感じてもらうことができた。また、参加者同士・若い世代との交流も生まれるなど、大きな成果が見られた。



包括からのひとこと

地域住民の意識や対応力向上の手ごたえを感じました。住民同士や近所の知り合いの認知症高齢者を支援している話を聞く機会が増えたことがあります。その反面、認知症支援は難しいという意見も多いです。専門職も含めた認知症テーマに沿った話し合いの機会を継続的に行う必要があります。

区役所からのひとこと

認知症予防を目的とした脳トレ教室では、男性の参加者も多く、認知症マフ講座という新しい講座を行うことで、高齢者と若い人の交流の機会となり、若い世代への認知症理解の普及となっており、画期的な取り組みと思います。認知症強化型地域包括支援センターとして、認知症気づき講座など認知症の早期発見・早期治療に向けた積極的な活動の展開を引継ぎ期待しています。



認知症になっても住み慣れた地域で過ごせるように 認知症の理解をもって見守りができる地域づくり

1

地域ケア会議から見えてきた課題

- ・ 認知症、若年性認知症の理解が不十分で、早期発見に繋がらない。
- ・ オートロックのため地域の関りが難しくなり孤立している。
- ・ 認知症が進行してからの相談になり、生活に不安を抱えてしまっている。
- ・ 問題行動により地域から孤立してしまっている。

2

対 象

地域関係者及び住民

3

具体的な取組み内容

- ①市営田島住宅集会場で「集いの場たしま」…令和元年6月8日、9月7日、令和2年2月8日の計3回開催
- ②地域ケア会議(個別ケース会議)…年間で14回開催。民生委員や地域関係者が参加
- ③認知症講演会・ワールドカフェ…令和元年10月23日開催
- ④認知症気づき講座…令和元年10月30日(生野南連合)、11月26日(田島連合)
- ⑤認知症カフェ「きてみてい」…毎月第2火曜日開催。
- ⑥たつみ家族会…令和元年5月16日、令和2年1月16日

地域特性

由緒ある神社や古い町並みが残り、地域により長屋や町工場が共存している。少子高齢化が進み、ひとり暮らし、高齢者世帯が多い。地縁が残る地域で、地域活動も盛んである。幹線道路周辺は地下鉄がとおり、マンションも多い為若い世代が多い。商店街があるも店舗の閉鎖が多くなっている。

4

取り組んだ成果と今後の課題

高齢率の高い市営住宅への啓発活動として、集会場を借り季節ごとの集いの場の開催や敬老の日の戸別訪問をしたことにより、地域からの相談が増加。2年前までは100件程度が今年度は240件に増加した。男性の相談が上がってきにくいとの意見があり「おやじカフェ」を開催したことにより、今まで地域行事に参加しなかった男性の方の参加につながった。地域ケア会議の回数を積み重ねたことで、参加率の増加、またケースを何度も体験することにより、地域力の向上、又ネットワークの強化につながった。今後の課題として、早期発見、早期診断につながらず認知症が進んでからの相談になっている。家族の気付き介護を担う若い世代の方への、認知症の理解、相談窓口としての周知活動がまだ届いていない現状が見えている。より効果的な周知ができるよう、検討が必要。



包括からのひとこと

「おやじカフェ」を開催してから参加者同士が顔見知りになり新たな関係性が広がってきました。今までの地域行事と違って男性が気軽に参加されているのがうかがえます。今後も地域が主体となり男性が興味のある内容で開催していけるよう取り組み、又これを機会に新たな集いの場が派生していくのを期待しています。

区役所からのひとこと

男性の相談が少ないことに着目し「おやじカフェ」を開催、地域活動に初めて参加する男性の発掘につながっており、大変評価できる取り組みです。また、地域ケア会議にて、民生委員や地域の役員と連携が深まりネットワークの構築をされています。地域の会館等で周知活動することにより、昨年の2.5倍にも相談が増えているので、地域からも期待されています。



城東区城東・放出地域包括支援センター
(社会福祉法人至善会)

加齢や家庭環境、経済面など何らかの支援が必要になっても
地域で安心して暮らせる町づくり

～生活環境レベルでの地域包括ケアシステムを目指して～

1

地域ケア会議から見えてきた課題

認知症等高齢者を取り巻く問題から、地域とのトラブルを回避する必要がある。

障がいのある子どもを世話している親世代の問題や生活困窮をきたしている世帯の経済的な問題にて、すみやかに成年後見人制度などにつなげる必要がある。

人手不足により減退しがちな地域活動を充実させ、高齢者が抱える問題に対し包括が専門職として、多様な関係機関とともに、協同して課題を解決していく必要がある。

2

対 象

圏域内地域住民、町会役員、自治会役員、区役所、介護保険事業者、
他事業担当者(認知症初期集中支援チーム、生活支援コーディネーター、見守り相談室)

3

具体的な取り組み内容

- 諏訪地域にて令和2年2月8日 徘徊見守り声かけ模擬訓練後、地域フォーラムに57名参加され、行政をはじめ他職種との議論の場とした。
- 各地域による認知症予防活動の活動後の「見えてきた課題への対応のための会議」22回実施

※A.Cチーム：アクションプランプロジェクトチームの略



地 域	主団体	開催日	参加人数	世話人	特 徴
諏訪	A.Cチーム	第1(金)	約20名	民生委員・町会役員	男性の参加者が多い 3年経過
深江橋第2コーポ	自治会	第2(金)	約12名	民生委員・町会役員	自主的にお茶タイム 1年経過
東中浜	A.Cチーム	第3(水)	約25名	同上・女性部長・保護司	コーヒー代100円 4年経過
放出	A.Cチーム	第2(火)	約15名	民生委員・町会役員	歩こう会を開催 4年経過
今福①	市営住宅自治会	第1(土)	約15名	民生委員・町会役員	地域からの催しあり 3年経過
今福②	分譲住宅町会	第1(火)	約15名	民生委員・町会役員	自主活動が活発 3年経過

地域特性

城東区の南東部4小学校下(諏訪、東中浜、放出、今福)を担当。

諏 訪：町会役員の入替えがあり、地域活動の在り方の見直しが進んでいる。

東中浜：高齢者見守り隊、認知症カフェを地域主催で運営しており、防犯・防災活動にも積極的である。

放 出：町会活動が限局的で、孤立しているケースが少なくない。

今 福：高齢化率が40%以上で地域活動を担う役員の高齢化がある。

4

取り組んだ成果と今後の課題

【成果】

集い場(認知症予防プログラム)6か所においては、令和元年度に集い場を1か所新規オープンさせ、既存の5か所で3~4年継続した実績は大きい。その中で地域役員との関係性を深め、各事業を結びつける場として有用であった。参加されている地域役員が、実際の地域ケア会議にも参加されることもあり、地域の実情を知ってもらい課題解決の糸口を得る機会となった。



【課題】

複合的な課題を有しているケースの対応：金銭管理を含め、地域と関係機関が連携して支援していく必要がある。

潜在化している要援護者の抽出：町会、民生委員、自治会役員、管理会社等のキーパーソンに公助、共助の周知を進める必要がある。



地域における自助・互助の意識の向上：認知症サポーター講座や認知症予防プログラムを通して高齢者の自立との地域のキーパーソンとの地域課題の共有と対策をたてる機会として必要性がある。

包括からのひとこと

高齢者の福祉課題から、認知症に関する問題は切り離すことはできません。地域への発信としては、認知症予防、孤立予防というテーマで地域役員や関係機関を巻き込んで集いの場づくりを行いました。今後はコロナ禍の中にあってもつながるオンラインの活用等、新たな集い場の再構築を図ります。また、地域として必要な減災や防犯にも包括として協力体制をとり、ネットワーク作りの形を変化させながら、地域包括ケアシステムの推進を図ります。

区役所からのひとこと

認知症の高齢者に関する課題について、積極的な取り組みをされています。集い場(認知症予防プログラム)の展開では、高い満足度を得ています。また、地域役員との連携強化につながる効果が出ています。地域での関係づくりを積極的に行い、協働した活動を行っており、地域包括ケアシステムの推進をはかられています。引き続きよろしくお願いいたします。



せいぶカフェ (認知症カフェ)

1

地域ケア会議から見えてきた課題

- ・見守りに悩むふれあい員に対するフォローのため、既存のふれあい員のネットワーク活動以外に、地域での生活を支援する民生委員等、地域役員へ働きかけが必要である。
- ・徘徊された方の検索時には本人がよく行く先を把握した上で連携し対応する必要性がある。
- ・一人暮らしでも安心して生活できる地域づくりのために、顔の見えるおつきあいと関係機関で高齢者の情報の共有が引き続き必要である。

2

対 象

- ・担当圏域内のおおむね65歳以上の方
- ・地域が気になったり、心配されている方
- ・地域との関係が希薄で、今後地域とのつながりが必要だと考えられる方

3

具体的な取組み内容

- ・圏域内地域の福祉会館を巡回しカフェを企画した。(4地域開催、1地域は新型コロナウイルス感染症の影響で中止)
- ・鶴見区在宅リハビリテーション連絡会「りあっぷ」に協力依頼し理学療法士によるコグニサイズの紹介と参加者に体験してもらい健康寿命・認知症予防に心がけてもらえるように啓発した。
- ・大阪市が作成した『わたしのケアノート』を周知し、自分らしい生活をするための意思形成のきっかけ作りを行った。
- ・地域支援が必要な方をインフォーマルサービスにつなげられるよう、つなげ隊や地域役員、地域の介護保険事業者と打ち合わせをして地域支援を行った。
- ・障がい者基幹相談支援センターや認知症初期集中支援チーム、見守り相談室などの公的機関については、リーフレットの配布だけではなく担当者のご紹介と説明時間を設けて周知を強化した。
- ・障がい者基幹相談支援センターや認知症初期集中支援チームなどの公的機関とケアマネジャーやヘルパーステーションなどの民間組織の専門職とのネットワークを構築した。
- ・包括が独自で作成している『地域資源まっぷ』(圏域内インフォーマルサービスの一覧表)の配布と説明を行った。
- ・高齢者がカフェの交流の場でくつろぎだけでなく、童謡や懐メロを歌唱、回想療法を含めて脳の活性化や心肺機能の大切さへの意識の向上を目指した。



地域特性

- ・担当圏域の総人口は45,734人(昨年度比+348人)、高齢者人口9,202人(昨年度比+141人)、高齢化率20.6%(昨年度比+0.2%)。しかし、市営住宅のある地区では高齢化率が顕著に高いところ(鶴見地域の一部38.7%、横堤地域の一部28.3%など)がある。
- ・認知症だけでなく、精神疾患など複合的な問題を抱えた世帯への支援も増えてきており、気になっている方や心配な方などを地域につなげることや、地域からの相談を早期に受けて支援を開始する必要がある。

4

取り組んだ成果と今後の課題

- ・せいぶカフェでの参加状況(4地域分まとめ)
参加者74名 地域役員8名 介護保険事業者16ヶ所 25名 関係機関5ヶ所 7名
- ・アンケート結果(参加74名 回収72名 回収率97%)によると参加者は80代が一番多い(昨年度は70代)
- ・コグニサイズのイベントに対する評価が非常に高い(楽しかった93%)
- ・『わたしのケアノート』においては、配布部数107冊
アンケート結果では86%が「活用したい」と回答しており、配布者へ活用方法と内容の理解を促せたと評価できる。
- ・地域役員と事前に参加者の打ち合わせを行い、カフェ終了後に関係機関と振り返りを行ったことで、地域の見守りへとつながられた。
- ・地域住民への周知と地域役員によるボランティアとしてのつながりを持てる機会となった。
- ・地域役員や民間の介護保険事業者がさまざまな公的事業の窓口や機能、相談内容などを紹介できる機会にもなった。

(今後の課題)

- ・認知症予防に関するイベントへの参加を促すことで外出の機会を得られることもあり、情報提供を継続する必要がある
- ・地域の相談窓口の周知を継続し、地域からの相談を増やしながら、見守りの仕方を地域と共に検討していく機会を増やしていく必要がある。
- ・新型コロナウイルス感染症や災害などにより中止になった際、参加する予定だった方をフォローする必要がある。

包括からのひとこと

平成25年度から、毎年圏域内5地域の福祉会館への巡回カフェとして取り組んでいます。当初は地域と認知症など気になる高齢者を、また介護保険事業者の顔つなぎの場としてスタートしましたが、複合的な問題を抱えた世帯への支援も増えてきたため、障がい者基幹相談支援センターや認知症初期集中支援チームなど公的機関の専門職の参加を依頼し、さまざまな相談機関へのつなぎの場にもなっています。

区役所からのひとこと

せいぶカフェの参加者に、取り組みアンケートを実施し、継続参加のニーズを探り、常に新しい内容に取り組んでいます。外出の機会を増やすための取り組みを工夫しており、コロナ禍においても感染予防を考えながらイベントを開催し、地域と支援者をつなげる活動を広げています。状況の変化に対応しながら新しいことに取り組む姿勢で支援を継続しています。コロナ禍で活動が難しい状況下ではありますが「せいぶカフェ」を応援しています。



小地域におけるネットワーク構築の拡大と発展

1

地域ケア会議から見えてきた課題

- 1：認知症の人を早期発見ができる予防的支援体制の仕組みづくりを構築
- 2：複合的世帯の課題に対応できる支援体制

2

対 象

地域関係者・民生委員・各種関係機関・区役所

3

具体的な取組み内容

- ①要援護者の早期発見に向けて、平成24年4月から荻田北市営住宅における「井戸端会議」と平成26年10月から長居民生委員との「長居地域民生委員・包括・ランチ茶話会」の毎月の情報交換会を通じて、気になる段階から情報を頂き対応・支援・協働を行っている。
- ②上記の情報交換会のまとめとして、年度末に「課題抽出型ケア会議」を開催し、普段情報交換会に参加されている方の他に行政や関係機関(地域関係者・区役所・区社会福祉協議会・医療機関・障がい支援機関・居宅介護支援事業者等)も参加して頂き、顔の見える関係づくりからお互いの役割の強さを理解し合い、地域から見えてきた課題を共有しそれぞれの役割としてできることを確認した。
- ③ 荻田地域において、小地域でのネットワーク構築が不十分であったため、約4年前から地域活動協議会や民生委員協議会の参加、さらに地域行事のお手伝いを通じ、地域関係者と顔の見える関係づくりを積極的に実施し、信頼関係構築をした。

